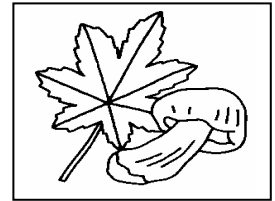


ぷらう 35号



発行：TEACCH プログラム研究会

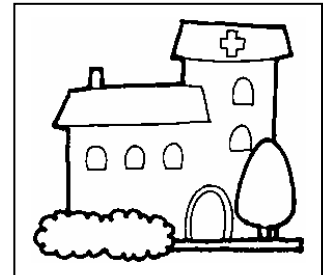
巻頭のことば ＜発達障害と問題行動-イギリスの支援(2)＞

TEACCH プログラム研究会会長 内山 登紀夫
(よこはま発達クリニック)

……前回の続きである。

今回は軽度保安病院であるヘイズ・インデペンデント・ホスピタルだ。これは軽度保安病院である。病院といっても、白衣のひとは誰もいないし、常勤の医者もいない。点滴ビンもない。所長は看護師の資格を持っているそうだが、日本風の病院のイメージとはほど遠い。アッシュレイの場合、一応精神科病院らしいところはあったが、ヘイズはグループホームを少し大きくした所といったイメージだ。英国自閉症協会(NAS)が直接運営している。パンフレットの書き方が面白いので以下に引用しよう。

「ヘイズ独立病院はブリストル郊外の Pilning と呼ばれる小さな村に位置し、4エーカーの敷地面積には整備された運動場や農場があります。一見、隔離されているようにも見えますが、大型のショッピングセンターへはわずか3マイルの位置にあり、都市部へのアクセスは非常に便利です」。



まるでマンションの広告だ。犯罪に関連した人のための施設の案内であることを考えると、ちょっと不思議な感じを受ける人もいるだろう。ヘイズでは12人のアスペルガー症候群の人を支援しているが、スタッフは90名もいる。5000坪の敷地に2軒の住居棟がある。対象は英国の精神保健法(1983)で保護が必要と判断される重度の行動障害を持つ人である。「多様な機能を備えていない個室」があり、全ての個室は「穏やか」で「十分なスペース」(low arousal, enough space)が確保されている。いわゆる「アクティビティ」も豊富に準備されている。列挙すると、IT、プール、音楽、リラクゼーション、アロマ、ダンス、トランポリン、ウエイトリフティング、ウォーキング、ショッピング、園芸、サイクリング、図書館、映画、演劇、博物館、などなどであり、カルチャースクールのパンフみたいだ。一般にイギリスの支援機関では、いわゆる作業に留まらず多様な趣味や芸術のアクティビティが準備されているようだ。ヘイズでは最低一日一回はスタッフと外出するようにしている。犯罪に関連した機関といっても、罰を与えるわけでも単に拘禁するわけでもない。

ヘイズの特徴はなんといってもアスペルガー症候群に特化した機関であるということで、ここでも診断と支援が直結している。日本ではアスペルガー症候群に特化した機関、施設や学校は一つもないだろう。ヘイズをはじめ NAS(全英自閉症協会)の機関が診断を重視するのは、診断と支援が密接に関係しているからだ。ヘイズにくる人は過去に犯罪的な行為をしているわけだが、その背景には適切な支援が得られなかったことがある。つまり過去に誤診され、不適切な環境下での不適切な治療歴がある人が多い。こういった人たちは決してもともと攻撃的だったというわけではなく、自閉症特性に対する配慮のない環境下でストレスや不安から生じる結果としての攻撃性を示すことが多い。

ヘイズはアスペルガー症候群のための機関であるから、常に自閉症スペクトラムの特性に対する配慮

がにみられる。当たり前のことだが、患者同士の交流を強要することは決してしない。交流を好む人には交流の機会が提供されるが、孤独を好む人には孤独が保障される。自閉症特性に配慮のない機関では無理に集団に入れることで自閉症の人を不安にさせ、結果として問題行動を誘発させていることも少なくないだろう。

入院理由はさまざま、「強盗」、「人質との立てこもり」、「傷害」、「放火」、「殺人に発展する可能性」などがあげられる。入院期間は18ヶ月から7年(開所以来)と幅広く、自宅に帰った人はあまりいないようだ。退院後は自閉症特性に配慮され、より拘束度の低い通常のグループホームなどでサービスを受けることになる。

ヘイズにおける過去の変化といえば女性患者の増加があげられ、現在12床中6床が女性用だ。女性患者のほうが社会とのジレンマに悩む傾向があるようだ。

ヘイズの5つの基本理念は

身体的に良好(physical well being)

認知的に良好(cognitive well being)

メンタルに良好(mental well being)

社会的に良好(social well being)

精神的・文化的に良好(spiritual and cultural well being)



であり、別に罰や謝罪や贖罪を強調しているわけではない。自閉症特性に配慮した環境設定を行えば、自然に問題行動は減少するというわけだ。

当然のことだがアスペルガー症候群の人の多くが罪を犯すわけではない。アスペルガー症候群のなかのごく少数の例外的な人が犯罪に関連する。しかし、こういうごく少数の例外的な人に対しても親の団体である全英自閉症協会は直接支援する機関を作る。日本のアスペルガー症候群や自閉症の人で罪を犯した人の支援についても、もっと考えなければならないと思う。(終わり)

おしらせ

7月7日、『E・ショプラー先生 ご逝去』という悲しい知らせが突然、飛び込んできました。あの優しく、思いやりにみちた笑顔に出会うことはもうないんだ…と思うと、深い悲しみに包まれています…。

ショプラー先生のご逝去に際し、TEACCH 研としてどのように弔慰を伝えるかということをご理事で相談し、メッセージを届けることにしました。また、ショプラー先生のご遺志を尊重し、エリック・ショプラー基金へ寄付することになり、各支部に呼びかけましたところ、快く協力いただきました。各支部から寄せられた寄付金を合計し、3,000ドルをエリック・ショプラー基金に寄付しましたことをご報告します。

事務局:野畑 光代

ショプラー先生の思い出

TEACCH プログラム研究会常任理事
新澤伸子(大阪支部)

機関誌「ぷらう」にショプラー先生の追悼文を書くという機会を与えていただき、心からの追悼の気持ちを何らかの形にしたいという思いと同時に、お亡くなりになったという現実に直面することにもなり、複雑な気持ちです。ショプラー先生の偉業は、私が語るまでもなく、皆さんご存知のことと思いますので、先生との交流のエピソードをご紹介します、そのお人柄を偲びたいと思います。

思い起こせば、1983年にロータリークラブの奨学生として、TEACCHに1年間留学する機会を得たのも、何の面識もない学生であった私がショプラー先生に1通の手紙を書いて、研修生としての受け入れの許可をいただいたことに始まります。この最初のお手紙から20数年にわたって、一貫していつも暖かく見守って下さり、導いて下さいました。ショプラー先生にお会いした方は、皆さん同じような印象をお持ちだと思いますが、自分のことを「とても尊重してくれている」と人に感じさせる何かをお持ちです。自慢話は一切なし、こちらが賞賛の意を表すると「そう言ってもらえると嬉しいよ。」と照れたような笑みを浮かべる先生でした。あのような稀有な人格はどのようにして形成されたのかといつも思っていました。



私がホームシックにかかっているのではないかという奥様の取り計らいか、先生が運転する自家用トラックの運転席の夫妻の間にちょこんと座り、草競馬に連れて行っていただいたことがありました。草競馬会場で息子さん・娘さんとも合流し、「ルーズマネー」という名前の馬に、1セント賭けたりして大いに盛り上がりました。家族のスナップ写真をとろうとして、息子さんが会場に止めてあったちょっとカッコいい誰かの車のボンネットに軽く肩肘をついて、ポーズを取っていたら、その車の持ち主のヤンキー風の若者が来て、怒鳴られるという場面がありました。息子さんは、肩をすくめて軽くやり過ごすというほんの数十秒の出来事だったのですが、その時ショプラー先生は、まるで大人に一喝された少年のように、シュンとしてしまわれ「最近では草競馬にも、いろんな人が来るようになって、昔はこんなことはなかったのに」と嘆いておられたのが印象的でした。

クリスマスにはTEACCHのスタッフと一緒にショプラー家のクリスマスパーティーに招かれました。ショプラー夫妻は自宅に、牛、ポニー、ウサギ、鶏、鳩など飼っておられて、ご自分たちで世話をされていました。訪問客が集まるまでの間、ショプラー先生は奥様とお二人で任天堂のテレビゲームをしておられたのは、びっくりしました。あれだけ世界的レベルでの公的なお仕事をされていて、プライベートライフでは、農耕から最新のテレビゲームまで余暇を楽しみ、そして家族もとても大切にされている、その幅の広さは凡人の域を超えていて、それでいて、あくまで自然体でいらっしゃるのです。

帰国後は、TEACCHで学んだことを自分なりに活かしていくという宿題の年次報告のつもりで、クリスマスカードで近況報告をしてきました。必ず夫妻連名で奥様手描きの水彩画のカードに、コメントをつけて返してくださいました。1986年の初来日以来、先生が来日されるたびに、幾度か日本でお会いする機会がありました。TEACCHプログラム研究会ができて、10年目くらいの時に、壁にぶち当たった時期がありました。各地で草の根レベルでの実践は広がってきたけれども、行政も巻き込んだ組織的な広がりには至らず、「一時期だけ構造化による支援をしても無意味だ」とか「TEACCHは技法ではないシステムだ」というけれど、日本でノースカロライナのまねをしても、絵に描いた餅ではないか」という批判に、応え得る実証がなかなか出せない時期でした。1996年に来日された折に、ご相談した時、先生は、「私よりノブコ

の方が日本の現状をよく知っているから、もしかしたら、私は間違っているかもしれないけれど・・・」と前置きをして、「私は日本のこれからについては、もっと楽観視しているよ。この 10 年の間に何回か日本のいろいろな地域を訪れているけれど、確実に関心は高まっているし、理解者も増えているように見えるよ。」と励まして下さいました。自閉症に関してはいろいろな療法があり、実際ノースカロライナでも、ファミリーティッド・コミュニケーションやホールディング・セラピーが流行った時期があったそうですが、日本でもそうだという話をすると、「ノブコはどう思う？」と意見を求められました。世界的な自閉症の権威が、私なんかの意見を聞く必要もないだろうと思いつつも、「それがショプラー流なんだ」と改めて感じました。ショプラー先生は、権威をもって独善主義に陥ることを、極端に嫌っておられたのだと思います。世の中の万民が褒め称えることであっても正しいとは限らないし、逆に誰もが省みもしないことに真実があるかも知れないのです。ショプラー先生の人と接する姿勢は、誰に対してもまず、その人のあるがままを受け入れるというものでした。

ある時は、日本での講演を終えて帰国されるショプラー夫妻を、1 歳半の息子を連れて見送りにいったことがありました。初めて間近に外国人と接して、緊張して真下を向いて一心不乱にアイスクリームを食べている息子に、先生がカメラを構えた際に、奥様が「ジュン、こっち見て」と声をかけたら、ショプラー先生は「そのまま、そのまま」と言って、その瞬間のあるがままの子どもの姿をシャッターにおさめられました。



1992 年に家族を伴って 8 年ぶりにチャペルヒルを再訪した際には、留学中に会った TEACCH クラスの子どもやソーシャル・クラブの青年たちに再会したいという私の希望をかなえるため、先生の秘書を丸々 3 日間私のために時間を割くように手配して下さいました。その時に会った自閉症の人たちが、誇りを持って仕事をしたり、自立に向けて学校で継続的な教育支援を受けている姿に、TEACCH の支援の方向性の間違っていないことを、確信しました。その折、「日本では、TEACCH は情緒の発達や心の問題を考慮していないという批判を受けることがしばしばあるけれども、先生はこういう批判にはどのようにお答えになりますか？」と質問しました。「心や情緒そのものを、取り出して育てることはできないけれども、人間の情緒は経験を通して育っていくものだ。私達は、自閉症の人たちが意味のある肯定的な経験ができるように支援することが、結果として彼らの自尊心や情緒を育てることになると信じている。」という風におっしゃいました。自閉症の青年たちとの再会を通して、ショプラー先生のこの言葉は、とても納得できましたし、この時の経験が、その後の私の実践の大きな心の支えになっています。

まだまだいろいろなエピソードが思い出されますが、紙面の関係上、このあたりで筆を置きたいと思いません。最後に、ユダヤ系ドイツ人として 1927 年にドイツに生まれ、ヒトラー政権下で少年時代を過ごし、次々と知り合いや友人が収容所送りになる中、11 歳の時に家族とともに貨物船でアメリカへ脱出したという体験が、先生の生き方に深く影響しているのだと思います。1971 年のショプラー先生の論文に「スケープゴートとしての自閉症児の親」(原題は Parents of Psychotic Children as Scapegoats)がありますが、精神分析理論に基づいて自閉症児の親を障害の原因としてスケープゴート化していた当時の風潮に対する強い危機感と親への深い共感が、「協同治療者としての親」という仮説を、研究と教育実践によって実証していく原動力になったのだと思います。

昨年 5 月に TEACCH 部主催のショプラー先生の引退記念パーティーでお会いしたのが最後になりましたが、「ふつうこんなに大勢の人に集ってもらうのは、葬式の時くらいだけれど、生きているうちに、こんな大勢の人に祝ってもらえてしあわせだ。」とユーモアたっぷりにおっしゃっていて、縁起でもないと思いました。家族と 9 人のお孫さんに看取られて静かに旅立っていかれたとうかがっています。もうこの地上にはおられません、世界中のどこにでも現れて、あの慈愛に満ちたまなざして、私たちを励まし導いて下さることだと思います。皆様と一緒に、ショプラー先生に心よりの感謝とご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

トレーニングセミナー報告

TEACCH プログラム研究会東京支部
トレーニングセミナー実行委員長 茶木 弓

去る、8月11日～13日、予定されておりましたとおり、3dayトレーニングセミナーを開催し、無事終えることができました。このセミナーを成功へ導くために多くの方のご協力をいただきました。お礼を申し上げますとともに、ご報告致します。

受講生の内訳は北海道2名、神奈川2名、愛知3名、石川2名、大阪1名、鳥取1名、福岡1名そして東京支部から8名、合計20名です。東京とは名ばかりで羽田から2時間近くかかる、とても都会とは言えない場所での開催に、受講生の方たちも「あれ？」と思われたのではないのでしょうか。遠くまで足をお運びいただき感謝いたします。最初の顔合わせでは緊張した面持ちで、遠慮がちの様子でしたが、セミナーが進むにつれ徐々に活発になっていき、受講生たちの顔つきがどんどん良くなっていくのを目の当たりに見て、運営しているわたしたちも心が躍るような気持ちになりました。最後の皆さんの感想の中で思わず涙・涙の場面があり、本当に胸が「じいん」と熱くなりました。

何もかもがはじめてのことで戸惑うばかりでしたが、とりわけ難しかったのが協力児の選定でした。どういうお子さんがトレセミに向いているのかということは今ひとつ？理解しないまま当日を迎え、セミナー初日には難しい顔をされていたトレーナーの先生方に内心(汗)をかいていた運営サイドでしたが、そこはさすがです。2日目にはにっこり顔で最終日にはVサイン。先生方のお力の偉大さに感謝と畏敬の念でいっぱいです。

スタッフの数は運営委員10名のほか4日間でのべ40名を動員いたしました。心もとない運営スタッフを陰でひなたで支えてくださったお手伝いの皆様、本当にありがとうございました。

このセミナーをとおし、改めてみなで力をあわせてひとつのことを成し遂げる素晴らしさを実感することができました。TEACCHが教えてくれた、大切なことのひとつだと思います。たくさんの方が手をつなぎあって灯したあかり。このあかりを消さないよう、たとえそのあかりが小さくならうとまた次の人へ、次の人へと手渡していけるよう今後も活動を続けていきたいと思っております。

会費納入のおねがい

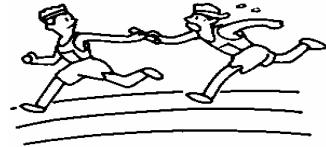
今年度から会費及び名簿管理業務を土倉事務所に業務委託しています。

- ・ 平成18年度の会費が未納の方には9月中に振込用紙を送付しますので、11月20日までに指定の口座に振り込んでいただきますよう、お願いします。
- ・ 12月には平成19年度の会費の振込用紙が全会員に送付されます。
⇒今年度、納入されている人は1月30日までに¥3,000を指定口座に振り込んでください。
⇒(11月20日時点で)今年度、未納の方は12月31日までに¥6,000を指定口座に振り込んでください。

尚、期限までに振り込まれない場合は会則に従い、退会となりますので、ご注意ください。

事務局:野畑 光代

列島リレー



支部だより (第2回・熊本・石川支部)

熊本支部だより

熊本支部会長 服部 陵子
(はっとり心療クリニック)

ようやく夏の終わり。7月の豪雨・8月の猛暑から開放され、熊本もしばし心地よい気候に向かいます。熊本支部は昨年で設立10周年を迎えました。この間、関東・関西・北海道・福岡・佐賀の先生方に多数おいで頂き、講演会、トレーニングセミナー、ミニセミ等々の講師としてご指導いただき、お蔭様で今日の基盤を築くことができました。熊本支部があったゆえに、地方でもさまざまな関連領域の学習ができ、中央の先生方とのご縁もできたことに改めて感動し、感謝の念を覚えます。こうしたご縁は九州 IEP 研究会(会長坂本友昭氏)時代からのものです。自閉症について色々な角度から学んで互いに力をつけただけでなく、職種や立場のことなる関係者が一同に介して交流する場ともなりました。

現在の会員数は440名、内訳は多い順に家族(24%)、施設および療育機関関係者(20%)、保育園・幼稚園(15%)、医療機関(15%)、学校(14%)、大学や相談機関などです(会員異動があり大まかな数値です)。学校の先生方の参加が少ないのが残念だと嘆いてきましたが、家族が構造化の意義を学び、それを担任の先生へ伝える形で、また療育施設や医療機関が学校との連携をはかることで教師会員も広がり、とてもうれしいことです。特別支援教育の制度化を前に、TEACCHプログラムから学びたいとの意識は熊本の教育界でもじわじわと高まっていることを色々な機会に感じます。

支部の活動は基礎講座(年間3講座)・実践報告・講演会・ミニセミ(今回で6回目になります)・ミニセミのための事前学習会・ミニセミ報告会などですが、基礎講座や講演会を自前の講師で担当する力もついてきました。勿論、外部講師の大切さはいつも変わりません。例会で報告される保育園や施設、または家庭内での実践は、子どもの特性と実態に十分に照らし合わせた上で構造化の実践につなげる姿勢がきちんとしており、評価の客観性と子どもを見る目の柔軟性や温かさの双方がいつも感じられ、内容は結構高度だと思います。会に参加することで、こうした雰囲気を感じて励まされ、癒される人もあるようで、これも大事な側面です。一部は鹿児島や宮崎県からの会員も遠隔にも関わらず参加され、満足していただけかな?と責任を感じるのですが、意見や注文をいただいた方が世話人への刺激になってよいかもしれません。

ミニセミの報告会は2回(2ヶ月)に分けて行い、準備にかなりの時間をかけて討議され(徹夜に近い人もあるとか)、年々ハイレベルになってきました。(整理されすぎて初心者には分かりにくいこともあるかもしれません)

今年の10月の講演会は服巻繁先生に PECS(絵カード交換式コミュニケーション・システム)についてお話いただく予定で、今から楽しみです。

熊本支部がこれからも勉強会と連携の場となるように世話人と会員一同力を合わせて会を充実させたいと願っています。熊本支部へのご協力、これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

石川支部だより

石川県立七尾養護学校

教諭 藤田実千代

いしかわTEACCHプログラム研究会は、2001年に佐々木正美先生をおよびして講演会を開催したことをきっかけに、それぞれの分野で実践・探求していたメンバーが集い、呼びかけて2002年10月に正式に発足した会で、活動を始めて4年になります。自閉症の理解のための連続セミナーや講演会も随時入れながら月1回の事例検討会や報告会を開催してきました。連動して毎月会報も発行してきました。会員数は、多少の出入りはあるものの300名を越えています。「こんな時どうしたらいいの?」という親御さん、保育士さん、学校の先生、施設の職員の方々等々に、「行ってみよう! いっしょに学ぼう!」と身近な方が誘って下さって、石川県を中心に富山県、福井県の方も参加して下さっています。地域では、活動が知られ、ネットワークの拡がりを感じているこの頃です。

毎回のアンケート等をもとに、企画・運営を考えているのは、小児科ドクターの会長をはじめとして、言語聴覚士、NPO法人ポーターの指導者、福祉施設指導者、学童保育担当者、福祉行政担当者、特殊学級担当教師や養護学校教師、そして、起動力の素晴らしい保護者の方々。いろいろな職業の人が集まって、いろいろな立場から意見が出ます。それぞれが本業に真剣に取り組みながら、そこから、半歩、一歩と枠を拡げ、繋がりを拡げながら活動し、少しでも自分たちを取り巻く状況を良くしようと取り組んでいます。得意なことも、キャラクターも様々なメンバーが、それぞれの強みを発揮し、弱みを補ってもらっている、また、エネルギーをもらっている会でもあります。ちなみに私は養護学校の相談員ですが、地域に出向いて出会う人に紹介したりしています。エリック・ショプラー教授、ゲーリー・メジボフ教授や佐々木正美先生はじめ、国内の実践家の多くの先生方から学ぶ多くのことから、何を大切にしていかなければいけないかを学び、実践していくことが出会う方の笑顔につながっていると思うからです。誰もが一人の人として、豊かに生きていく権利を持っている。そのことが実証される地域をめざしたい! ジェネラリストでありたい!とみんなが思っているのです。今後もいろいろな方のお力をお借りしながら、いしかわTEACCH プログラム研究会を充実させていきたいと思っております。各地の皆様にも講師依頼をお願いすることがあるかと思いますが、その際にはどうぞよろしくお願い致します。豊かな自然とそれに伴う豊かな食材、豊かなキャラクターの私たちがお待ちしております。

現在、2年後に実施するトレーニングセミナーに向け、ますます、パワーを結集させております。今後どうぞ、よろしくお願い致します。

TEACCH プログラム研究会

平成19年度 総会

日時：平成19年2月18日(日) 16:20~17:00

会場：佐賀県立生涯学習センター アバンセ

議案：平成18年度活動報告、会計報告

平成19年度活動計画、予算案

その他(会則改正など)

第 8 回 TEACCH プログラム研究会実践研究大会案内

今大会は、TEACCH プログラム研究会佐賀支部が担当です。今回は特別に佐賀で活動している特定非営利活動法人それいゆとの共同開催をすることになりました。それいゆが TEACCH 部との協力により毎年開催している TEACCH2デイ基礎講座の第2日を実践大会として行います。

1. 開催日時

2007年 2月17日(土)、18日(日)

2. 会場

佐賀県立生涯学習センターアバンセ

3. 大会テーマ「親との協働」

講師(2日間とも): ゲーリー・メジボフ氏 (TEACCH 部部長)

講師(1日目のみ): アン・パーマー女史 (元 TEACCH セラピスト現ノースカロライナ自閉症協会ペアレントコンサルタント)

4. プログラム(講義内容は多少変更があるかもしれませんので予めご了承ください)

それいゆ TEACCH2デイ基礎講座第1日		TEACCH プログラム研究会
2 月 17 日 (土)	10:00~10:20 受付	15:00 理事会 (2階特別会議室) 18:30 懇親会 ルネッサンスホテル創生 (TEACCH 研会員希望者のみ)
	10:20~10:30 開会行事	
	10:30~11:30 講義1 「自閉症の特性」メジボフ氏	
	11:45~12:30 講義2 「TEACCH プログラムの概要」メジボフ氏	
	12:30~13:30 昼食	
	13:30~15:00 講義3 「親との協働と行政との協働」パーマー女史	
	15:15~16:45 講義4 「ペアレントメンター制度」パーマー女史	
	16:45~17:00 質疑応答	
17:00 第1日目終了		
TEACCH プログラム研究会実践大会(それいゆ TEACCH2デイ基礎講座第2日)		
2 月 18 日 (日)	9:00~ 9:15 受付	
	9:15~ 9:25 TEACCH プログラム研究会会長の挨拶	
	9:25~10:45 講義5 「自閉症の最新情報・研究」:メジボフ氏	
	11:00~12:15 講義6 「構造化による指導:知的に遅れのある人から高機能まで」:メジボフ氏	
	12:15~13:00 昼食休憩	
	13:00~16:15 実践報告と意見交換①②③	
	16:20~17:00 TEACCH プログラム研究会年次総会	
	17:00~17:10 閉会式・諸連絡	
17:10 終了解散		

5. 受講費(TEACCHプログラム研究会会員は一般参加よりもお得な割引価格)と懇親会費

2日間両日の参加(それ以外 TEACCH2デイ基礎講座を2日間とも参加)	22,000円
実践研究大会のみの参加(第2日目のみ)	10,000円
懇親会費(2/17 土の夜)	5,500円(予定)

6. 参加の申し込み方法

- ・ 参加・発表申込書(別紙)に必要事項を記載し80円切手を貼った返信用封筒を同封の上、下記へ送付して下さい。(※内容不備の場合は手続きができませんのでご注意ください。)
- ・ 先着順にて受付の上、参加証、会場の地図、参加費入金手続きのご案内を送付いたします(※電話、FAX、メール等での申し込みは受け付けられませんのでご了承下さい)。
- ・ 参加申し込み締め切り: 1月12日(金) 当日消印有効(※ただし、定員に達した場合はその時点で締め切りますのでご了承ください)。

郵送先	〒840-0801 佐賀市駅前中央2丁目 7-24-205号 第8回実践研究大会 事務局 進藤 久見子
-----	--

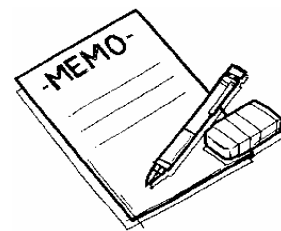
7. 実践報告者の募集!

- ・ 「親との協働」に関するテーマでの実践報告を3事例ほど募集します。メジボフ氏にコメントしてもらえるまたとない機会ですので奮ってご応募ください。
- ・ 参加・発表申込書に記入し別紙 A4の用紙 1 枚程度に簡潔な内容を添付の上お申し込みください。

8. 問い合わせ先: 実践研究大会事務局: 進藤久見子

FAX: 0952-33-4887 Eメール: kumikomm1023@yahoo.co.jp

※申し込まれてから3週間以内に参加証が送られて来ない場合は問い合わせをお願いします。



第8回 TEACCH プログラム研究会実践大会参加・発表申し込み用紙

ふりがな		支部名	
名前		2/17(土)の夜懇親会の参加の有無	参加する ・ 参加しない
大会参加の範囲 (どちらかに丸をしてください)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2/17(土)と2/18(日)の2日間とも参加する ・ 2/18(日)の第二日のみ参加する 		
勤務先 または 自宅の 連絡先	住所 〒		
	電話	FAX	
勤務先名		職種	
Eメールアドレス			
実践報告を申し込む人は記入してください	題名:		
簡単な内容(連名発表の場合はその人の名前も)			